

II 林良齋・池田草庵往復書簡集

III 書・序・跋・記

IV 四書注釈

V 編纂書

VI 筭記・詩文・他

最後に、「林良齋小伝」（白川武）、「林良齋の儒学思想史における位置」（吉田公平）がある。

本書の発刊の経過は、秋山理事の発刊の辞に詳しくあるように、多度津の文化遺産の整備と維持管理、文化財保存の一環としてなされたもので、そこには林良齋という思想家の顕彰がある。林良齋は、「鳴鶴相和集」（日本思想大系の『近世後期儒家集』所収）の中で、池田草庵や春日潜庵らとの往復書簡が見られる程度で、その後、岡田武彦先生の伝記（『叢書日本の思想家』所収）ができたものの、幕末の思想家としての全貌など窺う由はなかった。従って、本書の監修者吉田公平氏は、本書の刊行の意義を次のように述べている。

これまで『自明軒遺稿』、せいぜいが池田草庵との往復書翰集ぐらいでしか知られていなかった林良齋が本書によって、ほぼ全貌を読むことができるようになったことは、日本の精神文化史を考える上でも幸いなことです。林良齋ばかりではありませんせん。基本文献が公刊されないために、日の目を見ない豪傑が数多く隠されたままにあるのは、いかにも残念なことです。

ここに述べられているように、本全集の刊行を、心から祝い喜び、林良齋の研究が発展し、日本の精神文化に裨益することを祈りたい。

○松崎 賜著『林良齋』（シリーズ陽明学・27）

平成十一年十月、明德出版社刊。B6版、249頁。

本書は、池田草庵との往復書簡のうち、林良齋が書き送った19通と春日潜庵、吉村秋陽へのもの、他に贈序や筭記など二十八篇の文の訳注及び余説から成っている。

最初に思想的な説明を含んだ良齋の略伝が解説としてあり、その後本文（訳文、余説、書き下し文、語釈）があり、そのうち訳文は現代語としてよくこなれていて分かりよい。特に、往復書簡の良齋のものがすべて訳されたことに意義があるろう。余説の思想の面の説明は、この方面に疎いものにとっては有り難く、役に立つ。ただ語釈の出典の注は書名、篇名だけでそっけないものが多い。もう少し読み手を考えて工夫がいるのではないか。ついでに少し注文をつけるなら、2の「春日偶成」「偶成」の詩の原文を書き下し文の下の余白に入れてほしかった。また『鳴鶴相和集』所収のものは注記してほしい。またここに収められているものは皆活字化されていて（最近刊行の『林良齋全集』でなく、『陽明学大系』や『日本思想大系』などに収められているもので）注釈があること等の注記、良齋と交流のあった人についての参考文献なども、関連する文献（P20・21）のところに入れてほしい。それがあると、本書を読むことを機に、もっと深く読もうとする人にとって役に立つと思う。

（以上 正田啓佑）